

シンデレラ 作曲 1940~44年

”シンデレラの音楽で何よりわたしが表現したかったのは、シンデレラと王子の詩的な愛、その愛と目栄えと開花、その途上での障害、そして最終的に夢が満たされることである。”

原作はフランスのシャルル・ペローの童話で、これが各国語に訳されてたちまち世界中に広まったので、ソヴィエトでも昔から愛されておりました。この「シンデレラ」を題材にした音楽作品は本当に沢山存在しているのですが、当時はロシア人の作曲でこの童話に新しく生命を与えたオペラやバレエ作品は一つもなく、プロコフィエフが手掛けたこの「シンデレラ」が今日知られるような名作となったことは、ソヴィエト音楽界にとっても意義深いことでありました。

”私は舞踏というその本質を重視するように配慮した。私は伝統的な古典バレエの範疇で作曲した”

古典バレエというのは例えば、ガヴオット、パヴァーヌ、ブレー、メヌエットなどですが、それをワルツ、マズルカ、ギャロップに加えて巧みに使用し、彼はそれを融合させました。そんな新しい彼自身の解釈で、この作品は全貌を染め変えられています。

何より、この作品では、彼自身が「シンデレラ」という題材に魅了されていたことで、総じてこの音楽はしっかりとした魅力があり、その音楽構成も巧みです。

妖精のお婆さんが登場して四季の精と共にシンデレラが舞踏会に出かけるべく盛装する場面で、彼はこんな言葉も残しています。

”4人の妖精によって四季を象徴した。彼女たちによって自然は擬人化され詩的な表現がなされていたと思う。

さて、今日演奏する「グラン・ワルツ」は「シンデレラのテーマ」に位置づけられる重要な場面で使用されているワルツになります。

第一幕、シンデレラがまだ行ったことのない舞踏会と、経験のない愛を夢見て、舞踏教師が義姉達に教えていたガヴオットを思い出し、ほうきを手にしながら踊り始めます。そしてそこからこのワルツが密かに奏でられ、これから起こるシンデレラのドラマを予期させます。

第二幕、妖精達のおかげで盛装したシンデレラは舞踏会に辿り着きます。その美しさに魅せられた客人達が踊る「グラン・ワルツ」を背景に、王子とシンデレラは恋に落ちていきます。

第三幕、現実世界へと戻されたシンデレラは、舞踏会の断片をよみがえらせながら、掃除を始めます。変奏される「グラン・ワルツ」を背景に、彼女は仕事の手を止めては王子とのことを思い出し、浸ります。

ロミオとジュリエット 作曲 1934~1935年 編曲 2012年

このシェイクスピアの悲劇「ロミオとジュリエット」に、プロコフィエフはいたく感動させられ、共感を覚えました。

今までに多くの作曲家たちによってさまざまな形に作品化されていますが、それらの諸作品に対して、プロコフィエフのこのバレエ曲は、その情緒の深さ、個性の鋭さにおいて、また規模の大きさにおいても遥かに優れていると言えるのではないのでしょうか。

プロコフィエフのバレエ「ロミオとジュリエット」は、彼自身にとってきわめて重大な意義を持つ作品です。彼は当時、モダニズムの作風に飽き足らず、これを打破すべき芸術上の転換期の壁に立ち、悩み続けていました。音楽においても私生活においても、西欧的な影響を清算すべく、パリでの亡命生活を切り上げてモスクワに定住し、単純で表現的な手法の発見、社会主義思想に基づく抒情性豊かな作品作りに努力していました。そんな時に、人道的で詩的な「ロミオとジュリエット」に出会いました。プロコフィエフはこの作品で、実験主義から自然主義へ、モダニズムからロマンティズムに復帰して、困難な転換期の壁を見事に打ち破ったのでした。

このバレエの音楽的特徴は、主要人物と情景、事件などの説明が描写的で、個性的である主題を取り入れているということです。それは「ライトモチーフ」、要するに「わかりやすい旋律」や「短い動機」を起用し、全体を通してそれを反復使用しています。

特にジュリエットの場面は、実に多くの主題によって彼女の愛らしい性格を表現しています。それは、おどおどした感情をとらえられた明るく若い娘の形象だったり、愛の為には死をも恐れぬ情熱的な女となったジュリエットの形象だったり。

このロミオとジュリエットの明るくつつまじやかな愛の物語に対して、プロコフィエフは中世的偏見の闇の力、すなわち、キャピレット家、モンタギュー家の争いと、傲慢なティボルトの主題をしっかりと対立させています。「騎士たちの踊り」などがそれで、あまりに有名な主題です。

ヴァイオリニストのレイディア・バイチ氏とピアニストのマティアス・フレッツベルガー氏により編曲されたこの組曲は、物語の流れに沿いながらその情景を想像しやすい素晴らしいものとなっています。

- 1 Introduction イン트로ダクション
- 2 Julia ジュリエット
- 3 Tanz der Ritter 騎士たちの踊り
- 4 Balkonszene バルコニーの情景
- 5 Tanz der Parre カップルの踊り
- 6 Mercutio マーキューシオ
- 7 Kampf und Tybalts Tod 戦いとティボルトの死

ヴァイオリンソナタ 第一番 ヘ短調 op. 80 作曲 1938~46

プロコフィエフが残した弦楽器の楽曲は、奏法に関して専門家の助言を得て書かれ、その多くが各楽器の斬新な表現と響きを求める意欲的な楽曲として知られています。

特にこの 2 曲のヴァイオリン・ソナタはプロコフィエフの弦楽作品中、最高峰に位置する名曲であり演奏される機会も多いです。

この当時、粛清への不安と恐れの中で勃発した第二次世界大戦は、心身ともにプロコフィエフを疲れさせ、1945 年 1 月の発病以降、彼は死をより身近に感じていきます。

このような状況下、彼は、「ヘンデルのヴァイオリン・ソナタニ長調からイメージを得て」このヴァイオリンとピアノのためのソナタを作曲しました。いくつかの旋律素材が効果的に繰り返され、均整のとれた壮大な成形美のなかに詩情豊かな民謡風の旋律とプロコフィエフ特有の力強い響きが融和されています。

彼はこのソナタについて、「ヴァイオリン・ソナタ第 2 番に比べてより雰囲気をもつ」「第 2 楽章への導入部のような厳粛な第 1 楽章、力強く吹き荒れる第 2 楽章、穏やかで優雅な第 3 楽章、複雑なリズムで書かれたテンポの速い第 4 楽章」と説明しています。1947 年、この作品に対してスターリン賞が与えられています。なおこの作品は、親交も深かった巨匠ダヴィッド・オイストラフに捧げられました。

第 1 楽章

アンダンテ・アッサイ ヘ短調

自由な形式による朗唱風の楽章。まずピアノがオクターブで重苦しい旋律を始める。4 分の 3 拍子・4 分の 4 拍子を巧みに結合したこの旋律は楽章全体で暗示的に挿入される。ヴァイオリンは G 線上のトリルに続いて主要主題を呈示。この主題は次々と転調を重ねて現れ、さらに重音奏法をいかした陰鬱な旋律が力をこめてうたわれる。やがてピアノが 7 の和音をひそやかに始め、弱音器をつけたヴァイオリンが音階的な速いパッセージを重ねていく。プロコフィエフが「墓場にそよぐ風のように」とオイストラフに指示した旋律である。（彼が死を身近に感じていたことが、ここで想像されます。）

ピチカートによる 3 連符の音型がこれに応え、再び同様のやりとりが反復されたのち、短いコーダを経て終止する。

第 2 楽章

アレグロ・ブリュスコ ハ長調 2 分の 2 拍子

重量感あふれる楽章。ソナタ形式。ピアノのリズミックな演奏に特徴づけられる第 1 主題、のびやかに堂々とうたわれる第 2 主題が次々と呈示され、経過句を経て展開部に入る。これら二つの主題にいくつかの新しい主題が加わり多調的に展開。再現部では呈示部がそのまま縮小され、ヴァイオリンの上昇音階とともに終止する。

第3楽章 アンダンテ ヘ長調 4分の4拍子

透明な美しさをたたえた楽章。3部形式。印象派の楽曲を思わせるピアノ序奏に始まり、弱音器を付けたヴァイオリンが夢想的な主要主題を呈示、ピアノのこまやかな動きがこれを支える。ヴァイオリンとピアノ（左手）がユニゾンで抒情的なこの主題を反復、経過句を経て8分の12拍子による中間部へとうつる。ヴァイオリンがG線上の短い音型をさまざまに発展させ、ピアノが穏やかな表情でこれにこたえる。さらにヴァイオリンの短い走句に導かれて第1部が再現、ヴァイオリンのトリル、ピアノの音階的進行等をいかした流麗なコーダによって消えるように終止する。

第4楽章

アレグリッシモ ヘ長調

3部形式によるリズムックな楽章。まずヴァイオリンとピアノがユニゾンで主要主題を呈示する。8分の5拍子、8分の7拍子、8分の8拍子を見事に取り入れたこの主題は転調を重ね、華やかなピアノの装飾旋律を伴って反復させる。ダイナミックな動きに彩られた第1部から中間部（ポーコ・ピウ・トランクイロ、4分の4拍子）へ移り、哀調を帯びたヴァイオリンの旋律を中心に甘く情熱的なやりとりが切々と交わされる。（「ロミオとジュリエット」の、ジュリエットお思わせるかわいらしい旋律です。）続いて第1部が再現、ピアノによる7の和音とヴァイオリンの音階的走句を結合した第1楽章の旋律、第4楽章、中間部の副次主題が次々と挿入されてこのソナタをしめくくる。

ピーターと狼 Op. 7 作曲 1936年4月 編曲完成 2018年1月

わずか4日でテキストを書き、4月15日にはピアノ・スコアを完成。24日はオーケストレーションを完成。

”プロコフィエフは物語の人でした。”

小説を書いていたプロコフィエフが、台本と音楽、両面の才能を見事に発揮し、手掛けた「ピーターと狼」は、彼の作品の中でも最も親しまれ愛されているのではないのでしょうか。私が今回皆さんに伝えたいプロコフィエフの音楽で、この作品を避けて通ることはできませんでした。

この時期のプロコフィエフに言えるのは、子供のための作品を書くことに興味を持っていたことです。まずは音楽院時代からの友人ヴェーラ・アルペルスのお勧めをきっかけに、ピアノ作品「子供の音楽」が1935年に書かれています。

プロコフィエフは当時11歳と7歳の息子2人を連れて、妻リーナと共にモスクワの子供音

楽劇場に出かけました。その劇場は、ナターリア・サッツによって創設されていて、子供用オペラを上演していました。半年後にまたプロコフィエフが劇場に訪れたのをサッツが見て、子供向けの作品を作らないかともちかけたのが、そもそものきっかけでした。

「フルートは小鳥、そして物語の中に人物もほしい」というサッツの提案に同意して、プロコフィエフも音楽的構想をふくらませました。

初演後第 2 回目の上演で、サッツ自身がナレーションをつとめた時に大成功をおさめたことから、その後ナレーション部分が翻訳され、各国でも親しまれるようになりました。この作品はロミオとジュリエット同様、登場人物それぞれに「ライトモチーフ」が使われ、個々に楽器が与えられています。

ピーターは弦楽合奏、小鳥はフルート、あひるはオーボエ、猫はクラリネット、おじいさんはファゴット、狼は 3 本のホルン、狩人の射撃音はティンパニと太鼓。

子供の関心をオーケストラの音色に引き付けるため、物語の始めには各登場人物が楽器の音色と合わせて紹介されます。

物語は、ピーター少年が小鳥と協力して、暴れん坊の狼を捕まえるというもの。おじいさんに怒られるピーター。からかいあうアヒルと小鳥、両者を狙う猫、3 者を狙う狼、狼を狙う狩人。狩人を止めるピーター。ロシア民話を元に、弱肉強食の自然社会と、皆の為に正しい選択をするピーターの勇気と正義。明るく平和な物語が描かれています。狼に飲み込まれたアヒルの声が、皆さん最後に聞こえますか？

ヴァイオリン・ソナタ第 2 番 二長調 op. 94bis 作曲 1943 ~43

この作品は元々はフルート・ソナタから改作されたのは言うまでもなく、そのきっかけとなったのは、後にヴァイオリン・ソナタ第 1 番を捧げるダヴィッド・オイストラフであったことも有名です。フルート・ソナタの初演は、ハリコフスキーとリヒテルで務められ、大成功を収めたのですが、これを聴いたオイストラフが、この流麗な旋律に着目し、ヴァイオリン・ソナタへの改作を熱心に進めたのでした。ただそもそも、フルート・ソナタが完成された当時は、フルート奏者がこれを演奏しなかった、というのも大きな理由の一つで、いわゆる大祖国戦争としてソヴィエトが国家の勢力をあげて戦っていた時代、音楽家の活動は自由に恵まれていたとは考えにくく、またソヴィエト国外のフルート奏者もこの新作を知るはずありませんでした。なので、改作は自然な成り行きとも言えるのです。ヴァイオリンの甘くロマンティックな音色は原曲のもつ典雅な美しさをよりいっそう際立たせて、オイストラフによる初演は、「フルート・ソナタ」以上に好評を博しました。このソナタは彼がソヴィエト復帰後に書いた傑作の一つで、より深い内省的表現を求めた「晩年」の作風が伺えます。

第1楽章

モデラート ニ長調 4分の4拍子。

旋律が美しく明澄な楽章。のどかにうたわれる第1主題、舞曲風に軽快な第2主題が次々と呈示され、リズムミクなヴァイオリンの走句とともに展開部へうつる。ロシア的詩情をたたえた各主題が転調して相次いで展開されたのち、呈示部の約半分に縮小された再現部が続く。二つの主題が原調によりそれぞれ簡潔に奏され、やがて第2主題、第1主題を順に織り込んだコーダが余韻を漂わせながらこの楽章は締めくくる。

第2主題

プレスト イ短調 4分の3拍子 軽快なスケルツォ

生き生きとしたピアノの序奏に導かれてヴァイオリンが主要主題を呈示、二つの楽器が軽快なやりとりを展開して中間部に入る。まず憂いを含んだヴァイオリンの旋律が現れ、さらにピアノとヴァイオリンのおどけた走句が続く。ピアノの弾奏とともにスケルツォ主部が再現、冒頭の主要主題を用いたコーダによって終止する。

第3楽章

アンダンテ ヘ長調 4分の2拍子

印象派風の抒情的な楽章である。ピアノの穏やかな伴奏にのせて、ヴァイオリンがまろやかな主要主題をうたう。同じ旋律がピアノへ受け継がれ安らぎにみちた静かなやりとりを進める。ヴァイオリンとピアノが短い音型をさざ波のように応答しあう中間部をはさんで第1部へ。まずピアノが冒頭の主要主題をオクターヴで呈示、ヴァイオリンが美しい装飾旋律を加えて夢想的な雰囲気の中終止する。

第4楽章

アレグロ・コン・ブリオ ニ長調 4分の4拍子

躍動感あふれる華やかな楽章。まずピアノのリズミックな和音がエネルギッシュなヴァイオリン旋律を支えて第1楽章を呈示。力強いこの主題は転調して反復される。ここでマルカートの副次主題が続き、さらにピアノがオクターヴで低音域から第2主題を始める。ポーコ・メノ・モツによるこの旋律にヴァイオリンが華やかな走句を重ね壮大な展開をみせる。再び第1主題、副次主題、第2主題が相次いで現れ、中間部へ移る。哀愁に満ちた主題がヴァイオリンによって奏され、ピアノは規則正しいリズムをきざんでゆく。

この旋律がクレッシェンドとともに展開されたのち、再現部に移る。

簡略化された再現部ではまず重音により迫力を増したヴァイオリンが第1主題を堂々と歌い上げ、副次主題がこれに続く。さらにヴァイオリンとピアノで第2主題をおごそかに強調し、第1主題に基づくアレグロのコーダを経て終止する。

参考資料：音楽之友社 作曲家別名曲解説ライブラリー プロコフィエフ

音楽之友社 プロコフィエフ 自伝／随想集

群像社 プロコフィエフ短編集

日本楽譜出版社 ピーターと狼